

背負う情報処理技術者に広く親しまれる学会誌に向けての改革を成功させるため、会員諸兄のご理解とご指導・ご支援を期待したい。

参考文献

- 1) 三浦武雄：会長就任にあたって，情報処理，Vol. 30, No. 6, p. 615 (1989)。
- 2) 白井良明：情報処理技術者の将来と学会誌，情報処理，Vol. 30, No. 9, p. 1013 (1989)。
- 3) 三吉健滋：情報処理学会とソフハウス，情報

- 処理，Vol. 30, No. 3, p. 205 (1989)。
- 4) 板倉征男：会員3万人時代の学会誌，情報処理，Vol. 30, No. 7, p. 765 (1989)。
- 5) 三木彬生：30周年記念事業に思う，情報処理，Vol. 30, No. 11, p. 1289 (1989)。
- 6) 山田昭彦：分かりやすい学会誌を目指して一学会誌改善宣言一，情報処理，Vol. 31, No. 3, p. 311 (1990)。
- 7) 昭和62年度事業報告，信学誌，Vol. 71, No. 6 (1988)；昭和63年度事業報告，同，Vol. 72, No. 6 (1989)；平成元年度事業報告，同，Vol. 73, No. 6 (1990)。



(3) 論文誌

益田 隆 司†

和文論文は、当初は、学会誌に一般の解説、講座などといっしょに掲載されていたが、1979年1月から、論文誌として分離発行された。隔月刊としてスタートしたが、論文数の増加にともない、1986年からは月刊となった。過去5年間の投稿論文数、掲載論文数、総ページ数を表-1にまとめる。この間の論文採録率は約67%である。現在、採録決定から掲載までの期間は、約1カ月で、積滞論文の数は少なく、採録論文数と掲載論文数のバランスはよい。

論文誌編集委員会では、月に一度開催され、主たる業務はむしろ、投稿論文の査読に関することであるが、そのほかに現在検討していること、あるいは、近い将来検討すべきことには、以下のようなことがある。

1. 査読委員の拡充

和文論文誌では、2名の査読者による並行査読を行っている。査読者の意見がわかれたときには、必要ならば、第3査読者をたてる。表-1の投稿論文数からみると、年に延べ500人以上

表-1 和文論文誌に関するデータ (過去5年間分)

年 度	投稿論文数	掲載論文数	総ページ数
1985	186	143	1,164
1986	218	148	1,258
1987	225	147	1,327
1988	253	130	1,212
1989	232	181	1,662

の査読者が必要である。一方、現在、査読委員の数は約400名である。すべての査読者に均一に査読を依頼することは論文の分野のかたよりからも不可能であり、どうしても同一の査読者に査読依頼が集中する傾向がでてくる。査読依頼が集中する査読者は、一般に査読も非常に迅速に行ってくださいる場合が多いが、そのような査読者に過度に負荷が集中することだけではできるだけさけたい。査読委員の数を増やすことは査読の集中化を解消する一つの有力な方法になる。また、これは査読期間の短縮にもつながることになる。今年度中に、査読委員の数をかなり増強することを考えている。

† 本会理事 東京大学理学部情報科学科

2. 研究会との連携

現在、当学会の研究会では、年に4回～6回の研究会、および、シンポジウムの開催によって活発な研究活動を行っている。それらの発表のなかで、すぐれたものを論文誌に投稿してもらうような機構を作る努力をする必要がある。現在編集委員会では各研究会担当の編集委員を割り当てている。また、これまでの例としても、1989年2月開催の、計算機アーキテクチャ、プログラミング言語、オペレーティング・システム、数値解析、アルゴリズムの各研究会、および、電子情報通信学会コンピュータシステム研究会共催の並列処理シンポジウムでは、後に、特集号(1989年12月)を組むというようにもやっている。本年開催の第2回目の同シンポジウムについても、同様の計画が進行中である。特集号は、研究会との連携だけではない。1988年2月には、「画像処理エキスパートシステム」の特集を行った。現在もサイエンティフィック・ヴィジュアル化のテーマで1991年3月に特集号を組むことを計画して論文募集を行っている。ただ、編集委員会には、特集号によって、一般論文の掲載が遅れるのは好ましくないという意見もある。

また、情報処理システムは世の中にきわめて数多く、そのような応用システムの研究開発に従事している会員の数も多いが、応用システム関係の論文が数少ない。情報システム研究会などと協力して、これらシステム関係の論文を増やすことが必要であるという意見も多い。

3. 編集委員会の強化

現在、編集委員会は18名で構成され、それ

ぞれ、担当分野がきまっているが、一つの問題は、編集委員が大半東京地区の在住者であるということである。編集委員会の主な業務が、査読委員の割当て、査読状況の管理、査読結果に対する判断であるということを考えると、編集委員全員が必ずしも、毎回編集委員会に出席する必要はなく、論文誌という性格からも、東京地区以外の特に、大学関係者を編集委員に加えるのがよいという意見があり、今後早急に検討すべきことと考えている。

4. 査読業務のOA化

現在、査読業務はすべて手作業であるが、論文数、査読委員の増加などのために効率が非常にわるくなってきている。査読業務をOA化して、査読委員のデータベース、投稿論文の査読状況を管理するデータベースなどを作成し、査読業務の効率化を図ることは、査読時間の短縮化にもつながり、早急を実現すべき時期にきている。

5. 購読者数の拡充

現在、論文誌の購読者は5,700強名で、会員の約18%である。年間4,500円の購読料が必要であるため、購読者数をある程度以上に増やすことは難しいことかもしれないが、この割合が高いことは学会員の研究活動の程度を表す一つのパラメータにもなるので、是非購読者数を拡充する努力をする必要がある。むしろ、そのためには、より内容のよい、より読みやすい論文誌とすることが必要である。

より充実した論文誌とするために、会員の皆さまから種々のご意見を編集委員会あてに賜われれば幸いである。